

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：37117

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20118

研究課題名（和文）障害者の文化芸術活動を社会的価値の観点から推進するための新しい仕組みをつくる

研究課題名（英文）Designing the system to promote the artistic activities with people with disabilities from the point of view of creating the social value

研究代表者

村谷 つかさ（Tsukasa, Muraya）

筑紫女学園大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：30834428

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、評価学の手法を活用し、障害者支援施設で実施される文化芸術活動の目的と戦略、効果の構造を明らかにすることを通じて、社会的価値という観点から活動を評価し推進できる仕組みをつくることを目的とした。社会包摂につながる文化芸術活動の評価の課題を整理した上で、15年以上活動のキャリアを持つ障害者施設が芸術活動を行う目的と戦略、効果について言語化し、構造を示すことができた。また、各施設において文化芸術活動を通して求める芸術的価値は付随的なものであり目的とはされていないこと明らかにし、活動の成果を評価する軸を異なるステークホルダーに生じた変化を言語化することにより生成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、障害者の文化芸術活動について芸術的価値に関する研究活動と比較し社会的価値に関する研究は未だ十分ではないため、社会的価値に関する研究や実践活動の発展に寄与する基盤としての研究成果を上げることができた。また、社会的意義として、本研究は現場における実践知を言語化することにより指標を作成したため、障害者アートを実践する現場においても親和性の高い内容といえ、活動現場における活用が期待できる点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This current study aimed that to create the new system to promote the artistic activities with people with disabilities from the viewpoint of developing the social value for actualize the inclusion in Japan by utilizing the methodology of the program evaluation. Firstly, I tried to understand what the issues for the evaluation of the art projects were by literally study and interview research. Secondly, I investigated the actual situation at the 5 facilities for people with disabilities that had been continues arts projects more than 15 years and created the construction of their aims, strategies and output (outcome) by the artistic activities. I created some criteria to evaluate the art activities to promote them in an aspect of creating social values through those processes.

研究分野：デザイン

キーワード：社会包摂 デザイン 社会デザイン 障害者 アート

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

障害者の文化芸術活動を通し、既存の芸術や福祉の価値を超え共生社会の実現につながる社会的価値の創出が期待されている。2019年3月、障害者による文化芸術活動の推進に関し、国の方針としても「社会包摂に資する文化芸術活動の拡充にむけた事業」を展開することが示された[1]。そのなかで、社会的価値という観点から活動を評価するための指標が求められているが、未だ存在していない。一方、障害者がやりたいことや得意なことを発揮できる環境づくりを軸に、多様な活動を展開する障害者支援施設では、活動に関係した人の中で相互作用が生じ、新たな価値が生まれている事例が報告されている。そのような活動と生まれる価値の関係に関しては部分的な報告はあるが、体系的に捉えた研究はみられない。

目的を持った活動を評価するために評価学には、活動により最終的にもたらせられる効果(遠位アウトカム) 誰にとってプラスに働くか(近位アウトカム)と、具体的な戦略との関係を「手段 目的」の関係で構造化する手法がある[2]。障害者支援施設での文化芸術関連の活動をこの手法を用いて整理することで、関係者が何をどう考えて活動を行っているのか、その効果は何かを言葉にできる。そして、効果を手がかりに社会的価値も言葉で表せるようになって考えた。本研究により、社会的価値を観点とした指標作成や研究が促され、共生社会の実現に向けた活動推進という、社会への波及効果が期待できる。

2. 研究の目的

本研究は、評価学で用いられている手法を活用し、障害者支援施設で実践される文化芸術関連の活動がどのような目的と戦略で行われ、その結果どのような効果が生まれているのかという構造を明らかにする。それにより、活動を社会的価値という観点から評価し推進できる仕組みをつくることを目的とした。

3. 研究の方法

次の段階を経て、本研究の目的にアプローチを行った。まず、1)国内外の文献調査による当該分野に関する知見の整理を行い、社会的価値という観点から活動を評価し推進するための要件や課題を明らかにした。次に、2) 国内の先進事例を対象にフィールド調査により障害者支援施設における文化芸術活動の構造を明らかにし、3)2)で得られた構造を分析することで活動を社会的価値の観点から評価し推進できる仕組みづくりを行った。

4. 研究成果

交付期間において、コロナの影響によりフィールドワークの実施に支障が出たが、2020年度から2022年度にかけては、障害者分野に限らず、社会包摂に関連する事例の調査や知見の整理を行うことを試みた。社会包摂につながる芸術活動の評価に長年取り組む先駆者たちへのオンラインによるインタビューや文献調査から、評価は活動の目的に沿って行うことが重要だが、目的が明確でないまま紋切り型の事業評価が実施されることが多く、活動の価値を捉えることに役立っていないことなどが課題としてわかった。そしてこの課題には、事業実施団体や行政が、自分たちが推進する活動の目的を明確な言葉として具体化できていないという要因がある。活動の社会的価値を捉えるためには、各障害者支援施設における活動目的を明確に捉えるとともに、まだ言語化できていないが活動によって実現したいと願う未来の状況についても、質問を投げかけながら丁寧に言葉にしていく必要があると言える。

2023年度は、15年以上にわたる芸術活動歴のある国内の障害者施設5箇所(福岡2箇所、京都2箇所、滋賀1箇所)を訪問し、作業内容の調査と半構造化インタビューによる調査を行った(施設長4名と創作活動の責任者である職員9名)。研究期間全体を通じて実施した研究の成果として、各障害者施設が芸術活動を行う目的と戦略、効果について言語化し、構造を示すことができた。また、各施設において文化芸術活動を通して求める芸術的価値は付随的なものであり目的とはされていないこと明らかにし、活動の成果を評価する軸を異なるステークホルダーに生じた変化を言語化することにより生成することができた。

本研究成果の学術的意義として、障害者の文化芸術活動について芸術的価値に関する研究活動と比較して社会的価値に関する研究は未だ十分ではないため、社会的価値に関する研究や実践活動の発展に寄与する基盤となりうる研究成果を上げることができた。また、社会的意義として、本研究は現場における実践知を言語化することにより指標を作成したため、障害者アートを実践する現場においても親和性の高い内容といえ、活動現場における活用が期待できる点が挙げられる。障害者の文化芸術活動に対する評価は、作品の芸術的価値や障害者の社会参加などの福祉的価値に意識が向きがちであり、社会的価値とは何か、または活動と生まれる社会的価値との関係性を言葉で説明することは難しい。また、活動に関わる多様な価値観を持つ人が、意見を交

わし、どのような目標を立て活動を実行できるかという点にも難しさがある。2024年3月に公表された第2期の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」[3]においても、地域社会との関わりの中でいかに活動を推進するかという点は課題とされている。本研究課題が核心とする、共生社会の実現につながる障害者の文化芸術活動を、異なる立場の関係者が協働して促進できる仕掛けをつくることは可能かという、学術的「問い」に応える成果を得たと考える。今後は、コロナ禍などによるフィールドワークの遅れによって実施できなかった、本指標の検証を現場で行い、現場の職員が活動を行う際に活用できるツール等のデザインを開発することが展望として挙げられる。

参考文献

- [1] 文部科学省・厚生労働省，障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画，2019.
- [2] 源由理子，参加型評価 改善と変革のための評価の実践，晃洋書房，2016.
- [3] 文部科学省・厚生労働省，障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（第2期），2024.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村谷つかさ
2. 発表標題 社会包摂につながる芸術活動のアートマネジメントに必要な「視点」の生成
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村谷つかさ
2. 発表標題 評価に向けて言葉を得る
3. 学会等名 アートミーツケア学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 九州大学ソーシャルアートラボ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 256
3. 書名 アートマネジメントと社会包摂	

1. 著者名 文化庁 x 九州大学共同研究チーム	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 240
3. 書名 文化事業の評価ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------